

日本の近代化と京焼の近代化、 それは紅猪口の近代化

文明開化と京焼の危機

明治の開国を機に西洋の多様な技術や文化が導入され、日本社会に新たな価値観をもたらす。化粧品業界は西洋との出会いにより、中身の品質・外見のデザイン等に大きな変化が起きたわけだが、一方、江戸時代に円熟した日本独自の伝統文化や伝統工芸は、生き残りをかけた激動の時代を迎えることとなる。

京焼は、一般的に京都の市街地周辺で焼成されてきた陶磁器のことをさし、16世紀末～17世紀初頭に陶器生産が始まったと考えられている。明治2年(1869)に東京奠都、明治4年(1871)に廃藩置県が遂行され、有力なパトロンであった公家、大名家、豪商たちを移転などにより失い、需要が著しく低下した。明治維新は、京焼にとって非常に大きな逆境であったが、新しい時代の風を読み、近代化を成し遂げた京焼は伝統の中に革新を生み出す。

京焼二大勢力・清水焼と粟田焼、海外進出への道程

開国以降、存続の危機を迎えた製陶家たちは様々な道を模索する。19世紀に清水五条坂で磁器生産が本格化した清水焼においては、国内向けの茶器、飲食器類作りを続けながら、電気碍子やタイル、硫酸壺といった化学用陶磁器も製造していた。清水五条坂における化学用陶磁器製造は、一時的なものであったが、伝統を守るだけでなく新しい産業の振興に力を注いだ先触れである。



幹山伝七「松絵金彩水差」・明治12年(1879) 京都府京都文化博物館管理

そして、一部の製陶家の間では西洋風の磁器試作が開始される。とりわけ幹山伝七(1821-90)は、尾張瀬戸の陶工の家に生まれ、彦根藩窯の湖東焼を経て、文久2年(1862)に京都へ移り磁器製造を始めた京焼界の新興製陶家である。磁器を専業とし、ドイツ人化学者ゴットフリート・ワグネル(1831-92)の教授を得て、明治3年(1870)に京焼で最初の西洋釉薬、顔料の試用に成功する。幹山はいち早く京焼に西洋絵付を導入し、幹山の色絵磁器は宮内省御買上げや、海外の博覧会等で高い評価を得た。



六代錦光山宗兵衛「上絵金彩金鶏鴛鴦図花瓶」・明治前期 宮内庁三の丸尚蔵館蔵

また、色絵陶器を主とする粟田焼では、六代錦光山宗兵衛(1823-84)が釉薬の改良に取り組み、明治3年、粟田焼に錦手技法を取り入れた「京薩摩」という精緻な上絵付の採画法を開発する。京薩摩とは、貫入のある白素地に、多彩な色絵と金彩で絵付された陶器である。本家薩摩(鹿児島)で作られた本薩摩に対して、京都で作られた薩摩焼なので京薩摩と呼ばれる。薩摩焼は、日本が初めて正式参加した第2回パリ万国博覧会(慶応3年・1867)に薩摩藩が出品し西洋の人々の目に留まり、つづいて、明治6年(1873)のウィーン万国博覧会でも人気を博し、ジャポニズムの契機ともなった。薩摩金欄手の海外での評価を知り、それに倣った独自の京薩摩も明治5年(1872)までに本格的な輸出を開始した。

輸出陶磁産業の不振

ジャポニズムの隆盛に乗り海外への輸出に再興を見出した京焼であったが、次第に輸出は伸び悩み始める。それは莫大な国家予算を費やし参加した明治33年(1900)の第5回パリ万国博覧会において、決定的なものとなった。当時、西洋では新しいデザイン様式であるアール・ヌーヴォーの隆盛がピークを迎えていた。それに対し日本の工芸品は、依然として守旧的な意匠のままであったため、日本の出品には厳しい評価が下された。パリ万博

【特集】

日本の近代化と京焼の近代化、
それは紅猪口の近代化

【ご案内】

- エデュケーション・レポート6
- テーマ展示
「近代の紅猪口 ― 小き京焼の世界」開催
- 手仕事ギャラリー
「赤絵細描と共に歩んだ軌跡
― 福島武山 喜寿展」開催
- 講座 最新情報

を視察に訪れていた京都高等工芸学校初代校長の中澤岩太は、翌年刊行の『大日本窯業協会雑誌』にて「図案の妙味がない。立派な図案家がない。」と述べている。この危機感への対応は非常に早く、日本の窯業界はすぐさま図案改良に臨み、多くの製陶業者がアール・ヌーヴォーの意匠を取り入れた製品を作り、図案改良のための研究団体や組織も多く設立された。

ところで、パリ万博以前からすでに陶磁器輸出不振の予兆は見え始めていた。明治10年代はジャポニスムの絶頂期であったはずだが、明治14年(1881)～明治17・18年(1884・85)頃には輸出額が最盛期の半分近くにまで落ち込んでしまい、明治20年代には経営難から倒産する美術工芸品製造会社も出てくる。このような輸出不振の要因を、博覧会や工芸振興行政に携わった官僚の塩田真は的確に分析している。塩田は『繭糸織物陶漆器共進會審査報告書』(明治18年・1885)の緒言の中で、「今の輸出低迷の要因として、開港以来、工人が高額で売れる装飾具の製造ばかりに心を傾け、粗製濫造に陥ったこと」、「外国の貿易商がようやく日本の事情に通じてきて、今までの品は外国人向けで日本人の必需品ではないことを知り、興味をもたなくなったこと」、「日本の古陶磁の名品が輸出され、海外で古陶磁が美術鑑賞の対象になり新製の品が価値を下げたこと」の3点を挙げている。

また、塩田と共に明治初期の工芸振興の中心人物であった画家・工業デザイナーの納富介次郎は、同共進会にて「美術品ト応用美術品ト普通雑品トヲ製造スルノ目的」という講演を行なっている。つまり、製造家たちに室内装飾用の美術品(美術工芸品)と、応用美術品(上等な日用品)と、普通雑品(日常雑器)を明確に区別し、国内需要か国外需要かといった顧客のニーズに合わせた製造をすべきと説いている。

さらに興味深いことは、明治9年(1876)の時点でイギリス人デザイナーのクリストファー・ドレッサーが明治政府の依頼で全国を視察した際に「各地ノ陶山ニ於テ花瓶製造ヲ廃ス可キ事」と報告している¹⁾。内容は、「日本で製造されている輸出品は、室内装飾用の花瓶ばかりで、生活用品はほとんどない。ヨーロッパでこうした日本風の室内装飾花瓶はどここの家にもあって、すでに余りが出ている。花瓶はもう供給過剰だ。一方、日用の飲食器などは破損する。日用品は新陳交代するものだから、花瓶の製造をやめて日用必需品をつくるべきである。」と示唆しているのである。その他にも、①陶器の文様が細密すぎるため、かえって質を落としている。②日用の品と室内装飾品の別を知らず、普段使いのものまで手の込んだ彩色を施してあるため、需要に適さない。③製造スピードが遅く、少数多品種のため、まとまった数量の需要に対応できない²⁾。など散々たるいわれようだが、輸出が好調であった時期にすでに警鐘を鳴らしていた人物がいたことは注目に値する。

大量生産体制への転換

—京都初の機械製磁器工場の設立—

室内装飾品の陶磁器は供給過剰傾向となり、海外の京焼需要も美

術品から日用品に転換し始める。この動きに即座に対応するためには、家内工業的な製陶体制から大量生産に対応できる大規模な工場制への切り替えが必要だった。そこで明治20年(1887)に京都最初の機械製磁器工場である京都陶器会社が東山区福稲柿本町に設立された。資本金20万円、従業員125人を数え、フランス製の製造機械と日本初の丸窯を使い、西洋の製陶技術を導入し、大量生産による輸出用磁器の製造を目指した。主にアメリカ向けに洋食器類を生産していたが、経営難のため明治26年(1893)には国内向けに転換し、耐火煉瓦や電気磚なども生産したが、明治32年(1899)に解散した。

近代化の中の紅猪口

京都陶器会社は田中源太郎や濱岡光哲ら京都の実業家21名を發起人として設立されたが、この發起人の11番目に西田清左衛門という人物が名を連ねている。西田清左衛門とはおそらく、京都御幸町三条上ルにあった紅屋西田清左衛門、通称紅清のことかと思われる。紅清は江戸時代から昭和10年代まで紅製造を営み、明治中期以降は「小町紅」に代わる自舗の独占商標として「みやこ紅」を使用している。今回、当館で所蔵する明治中期の「みやこ紅」紅猪口2点を掲載する。



上:色絵秋草文紅猪口 明治時代中期
下:色絵群鶴文紅猪口 明治時代中期 当館蔵

これらが京都陶器会社製の紅猪口かどうかは分からない。同社製品には、その製造を示す窯印や銘などは付されず、伝世品もほとんど伝わっていないため知る由もない。と言いつつも京都陶器会社が国内向けに

転換する明治26年(1893)と、紅清が「みやこ紅」の商標を使い始める時期がほぼ一致していることは何ら関連があるかもしれない。いずれにしても、この2点の紅猪口が江戸時代の紅猪口の文様とは異なり、近代以降の革新的な文様であることは看取できるだろう。

化粧紅(本紅)は日本独自の化粧料である。その観点では紅猪口を海外需要向けに製作するとは考えづらいので、西田清左衛門が京都陶器会社設立の發起人になった利点も不明である。しかし、紅猪口は日用品でありながら、女性の持ち物である化粧品としての装飾性もある程度保っておかなければならない。明治中期は、まだ日本にリップスティックは入って来ておらず、お猪口形の本紅が全盛の時代である。いくら中身が上質な紅であっても粗製の器では中身の品質も疑われるだろうし、使う側の気分も上がらない。西田が京都陶器会社の發起人になったのは、京焼磁器存続への一途な想いからであろうか。

1) 石田為武 筆録[他] 1877 『英国ドクトルドレッセル同行報告書』

2) 文中の内容は、花井久穂 2012 「『美術』と『産業』のわかれ道—産地主義の芽生えとワグネルの『美術の要用』」『明治・大正時代の日本陶磁—産業と工芸美術—』より引用。従って要約は花井氏の所感である。

学ぶ・楽しむ

紅ミュージアムのいろいろ

毎年夏休みには、「夏休み子ども自由研究」と題し、小学生を対象とした複数の講座を開催していますが、今年は、緊急事態宣言が発令されたことを受け、定番講座である「紅ってなあに」も、対面ではなく、初のオンライン開催としました。

また、今年は新しい企画として、ご自宅で行うことができる「紅ミュージアム×MYミュージアム」というプログラムを実施しました。これは、「生活の中で使われる道具」<デザインや形がすてきなもの>をテーマにオリジナルの展示室を作る、というプログラムです。展示する紅ミュージアムのコレクション(=紅ミュージアムの収蔵品の写真)と、MYミュージアムのコレクション(=ご自宅にある「なにか」の写真やイラスト)を決め、まるで本物の博物館や美術館のように、それについて調べ、説明文を書き、画用紙や箱などに展示していきます。

参加者には「紅ミュージアム×MYミュージアム」キットが届き、その中には展示室の作り方のガイドや紅ミュージアムの収蔵品(江戸時代後期～明治時代に生活の中で使われた、身だしなみを整える道具)の写真がたくさん載った「コレクションシート」、展示に使用できるステッカーなどが入っています。



「紅ミュージアム×MYミュージアム」キット

そのものをじっくり観察することで、時には新たな発見があったかもしれません。また、共通テーマのもと、ご自宅の中で自分のお気に入りの道具を探す作業も楽しかったのではないのでしょうか。

プログラムには、小学1年生～6年生の15名が参加し、それぞれ頑張って取り組んでくれました。

コレクションの説明文を書くためには、そのものの特徴や描かれている文様などを知る必要があります。



花や鳥などの可愛らしいモチーフがデザインされた収蔵品を選んでくれました。工夫したポイントは「収蔵品と同色のキラキラした装飾」と、オンライン発表会で教えてくれました。

参加した子どもたちに感想を聞いてみると、どのように展示したら楽しく観てもらえることができるか、ということまで考え、工夫している子もいました。まさに、博物館や美術館が展覧会を作る時に気にかけているポイントです！



1層目にMYミュージアムのコレクション、2層目に紅ミュージアムのコレクション、という立体的な作品を作ってくれました。棒をくると回すと裏に説明文が書かれている、観るのも楽しい作品です。

来館不要のプログラムであったため、講座の醍醐味である、参加者の皆さんと直接お会いすることは叶いませんでしたが、感染症対策の観点から安心してご参加いただけたと思いますし、遠方に住む子どもたちにも参加してもらうことができました。また、近隣に住む子どもたちは、その多くが夏休み中に保護者と一緒に来館してくれました。このプログラムが、博物館や美術館に親しみ、そして、その収蔵品や作品に興味を持つきっかけとなれば嬉しいです。



展示室づくりに着想を得て、なんと「ミュージアム」を作ってくれました。屋上には紅花畑があります。入口に検温や消毒があるという細かい工夫も。

※以上4点の作品画像は、参加者の保護者からご提供いただきました。

テーマ展示「近代の紅猪口 — 小さき京焼の世界」

2021年10月26日(火)～2022年2月26日(土)

開国以降、西欧から新しい技術や文化が導入され、人々にも新しい価値観が生まれるようになりました。しかし西洋文化の急速な浸透は、貴重な日本の伝統工芸を衰退させることにつながってしまったといわれています。伝統工芸の中心地である京都で作られた京焼も手痛い打撃を受けましたが、明治初頭に欧米諸国で開催された万国博覧会への出品以降、ジャポニスムの隆盛と共に海外で美術的価値が見出されるようになりました。やがてそれは紅猪口の文様にも変化をもたらします。紅猪口は実用品でありながら、化粧容器として美術品のような煌びやかな要素も併せ持つ特異な器です。今展は実用品・美術品の両視点から近代京焼の紅猪口を展覧します。

上:色絵松竹梅文紅猪口 下:色絵秋草文紅猪口



手仕事ギャラリー「赤絵細描と共に歩んだ軌跡 — 福島武山 喜寿展」

2022年2月26日(土) - 4月9日(土)開催 観覧無料 ※期間中、展示替えあり

技と日本の伝統を守り伝える伊勢半本店が、継承の困難な伝統の技を未来へ残そうとする活動や、途絶えた伝統技法の復元に尽力する取り組みを、作品と共にご紹介する手仕事ギャラリー。今回は九谷焼赤絵細描の第一人者、福島武山氏の喜寿を記念し、その歩みを象徴する歴代作品と、精緻で成熟した作品を多数所有する伊勢半グループ代表、澤田のコレクションをご紹介します。

幕末から明治期に盛行し、その後衰退した佐野赤絵。福島



赤絵網手めばえ 大皿



赤絵群仙人之図 香爐

氏はその赤と技法に魅せられ、前時代に生きた作家の名前から技術を学びました。また、周囲からの助言を吸収することで、失われた技術を補完構築、真摯に赤絵細描と向き合い、今もなお、多くの作品を世に送り続けています。

福島氏は、古より描かれてきた唐人や竹林の七賢人といった画題を得意とする一方で、繊細で均一な線を組み合わせ、日差しのぬくもりや風の揺らぎ、自然の息吹など躍動感を表現する独自のデザイン作品を確立。卓越した技や世界観、そして作品から溢れ出る福島氏の豊かな人間性にも着目しながら、これまでの軌跡をご堪能ください。



福島 武山 / Fukushima Buzan

日本工芸会正会員。石川県指定無形文化財保持団体九谷焼技術保存会会員。1999、第23回全国伝統的工芸品公募展、第一席グランプリ内閣総理大臣賞。2015、エルメス社時計文字盤(駒くらべ)制作。2016、第1回三井ゴールデン匠賞、石川県文化功労賞受賞。2020、第67回日本伝統工芸展出品作品(朱夏)宮内庁お買い上げ。2021、瑞宝単光章受章。

作家×小町紅 コラボレーション紅器

福島武山ご一門の皆様オリジナルの紅器を制作いただき、一点物の小町紅を販売します。また喜寿展を祝い、「寿ぎ」をテーマに制作いただいた作品を展示販売します。

参加作家：福島武山、織田恵美、見附正康、堀川十喜、林美佳里、架谷庸子、河端理恵子、吉村茉莉、福島礼子、吉田純鼓、広瀬絵美、板橋亜依、中谷麻瑚(順不同)



※過去に制作した紅器

〈併催企画〉

会期中、福島氏に作品を解説いただく「ギャラリートーク」、作家に学ぶ「赤絵細描絵付体験講座」を開催します。詳細が決まり次第、伊勢半本店webサイトにてお知らせします。(2022年1月初旬頃、申し込み受付開始予定)

講座 最新情報

《オンラインミニ講座開催》

当館の常設展示をより深くお楽しみいただけるよう、担当学芸員が見どころを詳しく解説する、全4回のオンラインミニ講座<展示解説>シリーズを、7・8月に開催しました。講座の最後に質疑応答の時間を設けたことで、オンライン講座ではありますが、参加者の皆様と双方向のやり取りをすることができました。

※本講座は「港区文化芸術活動継続支援事業」の助成を受け、実施いたしました。



《開催予定の講座》

毎年ご好評いただいている「和のパーソナルカラー講座」(講師：一般社団法人伝統色彩士協会代表 吉田雪乃氏)を9月23日(木・祝)に開催予定です。本講座では、伝統色彩士の先生に、草木染めの正絹を使い、参加者それぞれに似合う着物の色を選んでいただきます。

※新型コロナウイルス感染症拡大の影響により、延期や中止の可能性もございます。最新情報にご注意ください。



● 講座に関する最新情報は、伊勢半本店webサイトやSNSで随時お知らせいたします。メールでのご案内をご希望の方は、同webサイトのお問い合わせフォームよりお申し込みください。種別「講座・イベントについて」をご選択、必須項目をご入力の上、内容欄に「講座情報希望」とお書きください。



紅ミュージアム
BENI MUSEUM

Presented by
KISSME

開館時間 / 10:00-18:00(最終入館は17:30まで) ※短縮開館等の変動あり

休館日 / 毎週日・月曜日・創業記念日(7月7日)・年末年始

入館料 / 無料 ※ただし、企画展観覧は有料

アクセス / 地下鉄 東京メトロ銀座線・半蔵門線・千代田線「表参道」駅下車 B1出口(階段)より徒歩12分 / B3出口(エスカレーター・エレベーターあり)より徒歩13分

バス 渋谷駅東口バスターミナル 51番乗り場 都01新橋駅前「南青山七丁目」停留所下車

〒107-0062 東京都港区南青山6-6-20 K's南青山ビル1F TEL.03-5467-3735

最新の情報は当館webサイトでご確認ください。 <https://www.isehanhonten.co.jp>

